

令和 3 年 6 月 15 日現在

機関番号：32633

研究種目：基盤研究(B) (一般)

研究期間：2016～2019

課題番号：16H05569

研究課題名(和文)ヘルスリテラシーとストレス対処力の形成により生涯学び成長する介入モデルの開発

研究課題名(英文) Development of an Intervention Model for Lifelong Learning and Growth Through the Formation of Health Literacy and Sense of Coherence

研究代表者

中山 和弘 (NAKAYAMA, Kazuhiro)

聖路加国際大学・大学院看護学研究科・教授

研究者番号：50222170

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 12,300,000円

研究成果の概要(和文)：本課題はヘルスリテラシーに困難のある日本人が、ヘルスリテラシーとストレス対処力を形成しながら、生涯を通じて学び成長するための介入モデルを開発することを目的とした。高いヘルスリテラシーを有する人と予想された次世代に自らの健康と文化を伝える活動をする団体「新老人の会」会員の高齢者、多様な慢性疾患を持つ仲間による参加型のアプローチである慢性疾患セルフマネジメントプログラム(CDSMP)への参加者、健康関連サイトを訪問した一般住民を対象として調査を実施した。高齢者は医療者とのつながり、患者はプログラム参加、一般住民は意思決定スキルがヘルスリテラシーの向上に結び付く可能性が確認された。

研究成果の学術的意義や社会的意義

ヘルスリテラシーは、健康や医療の情報を入手、理解、評価し、適切な意思決定ができる力であり、健康格差の縮小と患者・市民のエンパワメントに必要である。本研究により、情報に基づく意思決定のためには、一人ひとりのスキルが求められると同時に、患者や高齢者といった健康課題に直面する人々にとっては、仲間がいる場への参加や医療者とのつながりによってヘルスリテラシーが高まることが示され、信頼できる情報によって意思決定できるためのサポート的な環境が必要であることが指摘できた。誰もがヘルスリテラシーを高められるような意思決定スキルの習得とその支援のためのコンテンツの開発が必要であることが示された。

研究成果の概要(英文)：This project aimed to develop an intervention model to help Japanese people with health literacy difficulties learn and grow throughout their lives while building health literacy and sense of coherence. We surveyed older adults who are members of the Shinrojin-no-kai (Association for the Newly Aged), an organization that promotes the transmission of health and culture to the next generation, who are expected to be highly health literate; participants in the Chronic Disease Self-Management Program (CDSMP), which uses a participatory approach by peers with varied chronic conditions; and the general population of those who visit health-related websites. We found that health literacy in these groups may be linked to connections with health care providers, program participation, and decision-making skills, respectively.

研究分野：看護情報学

キーワード：ヘルスリテラシー エンパワメント 意思決定スキル 参加型 看護情報学 健康生成論 Sense of Coherence 保健医療社会学

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

1. 研究開始当初の背景

(1) 人々に本来備わる潜在能力としてのヘルスリテラシーの低さによる健康格差

健康や医療の研究が進み、治療や予防の選択肢は増大し、多様で複雑な情報があふれている。このような健康や医療の情報を、収集、理解、評価、活用し、適切な意思決定をして行動できる能力はヘルスリテラシーと呼ばれる(中山, 2014)。そもそもリテラシーとは、単なる読み書き能力ではなく、社会に参加し、自らの目標を達成し、潜在能力を発展させるために必要な能力(国立教育政策研究所, 2013)であり、人間の尊厳を表す。ヘルスリテラシーの理論家 Nutbeam(2000)は、20世紀を代表する教育思想家であるフレイレが生み出したエンパワメントの概念であることを強調している(中山, 2014)。それは、ブラジルの貧しい農村の人々が支配者によって抑圧され、文字を知らされず、否定的な自己像を植え付けられて沈黙している「沈黙の文化」の発見から始まった。その状況を打開するために、自分たちが置かれている状況を客観的に自覚して、本来備わっている潜在能力を十分発揮できるように、環境を変える力を支援するものである。しかし、高度・専門化する健康情報では専門家と非専門家の格差は拡大の一途である。米国の全国調査(NCES, 2006)では、一般向けの健康情報を的確に理解できる人は9人に1人しかおらず、EUの8か国での大規模調査でも(HLS-EU Consortium, 2012)、ヘルスリテラシーに困難があり適切に意思決定できない人は47.6%を占め、これらが健康格差を生み、大きな人権問題であるとされた。

(2) 日本人のヘルスリテラシーは低く将来が危ぶまれる

そこで、日本での状況を明らかにすべく、研究代表者らは、EUで開発された尺度 HLS-EU-Q47 の日本語版を作成し、全国調査を実施した(Nakayama et al., 2015)。その結果、ヘルスリテラシーに困難がある(limited)割合は85.4%で、EU8か国の47.6%(うちオランダは28.7%)よりも格段に高かった(図)。尺度の平均点で

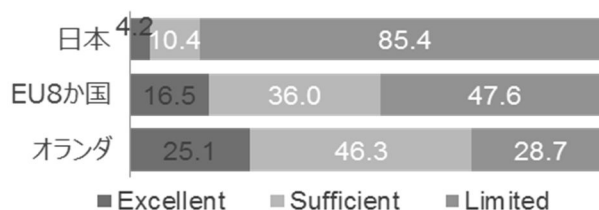


図 日本とEU8か国のヘルスリテラシーの比較

みると、日本は 25.3 ± 8.2 と、EU8か国 33.8 ± 8.0 より1SDも低く、最近の台湾(Duong et al., 2015)での結果 34.4 ± 6.6 と比べてもずっと低かった。項目別で「難しい」と回答した割合では「病気になった時、専門家に相談できるところを見つける」が日本63.4%、EU11.9%、「どの生活習慣が自分の健康に関係しているかを判断する」が日本45.5%、EU12.6%、「医師から言われたことを理解する」が日本45.5%、EU12.6%で、全47項目で日本のほうが高かった。現状の日本の平均寿命の長さとも矛盾するようであるが、それは高齢者を中心とした伝統の賜物であり、『ランセット』日本特集号(日本国際交流センター, 2011)では、他の先進国に比べて成人期の死亡率の低下は鈍化し、慢性疾患を適切に管理できている率はかなり低く、喫煙率や自殺率も高く、このままでは危ういと警鐘が鳴らされている。実際、研究代表者らの調査では、ヘルスリテラシーは健康指標と有意な負の相関を示した上、医療者と非医療者の比較でさえも差がなく、日本全体に「沈黙の文化」の存在が危惧されるため、潜在能力を発揮できるための早急な支援が必要である。

(3) ヘルスリテラシーとストレス対処による生涯を通じた学びと成長

また、同じ調査で、ヘルスリテラシーはストレス対処を糧にして成長する力である Sense of coherence(首尾一貫感覚、SOC)とも高い相関を示した。ヘルスリテラシーとSOCは、共に人々の持つポジティブな力、健康を生成する力であり、ヘルスプロモーションのコア概念となってきた。これらは相互に重なりつつ高めあっている潜在能力である可能性が示唆され、その関連とプロセスの解明が課題となった。そして、SOCはストレスを乗り越えて年齢とともに上昇することが確認されつつあるが(戸ヶ里 et al., 2015)、研究代表者らの調査でもヘルスリテラシーとSOCは年齢とともに上昇していて、健康課題やストレスを克服するなかで、学び成長し続けている人々の存在が確認された。ヘルスリテラシーが低い日本において、高いヘルスリテラシーとSOCを持つ人々を調査すれば、その技やノウハウ、学び方、ネットワーク、サポート資源などが明らかにできると考えられる。

そして、EUの高齢社会に向けたヘルスリテラシー向上の国際プロジェクト IROHLA(Intervention Research On Health Literacy among Ageing population)では、今後有望な介入のリストを準備した。個人だけでなく、仲間、コミュニティによる包括的なアプローチで、エンパワメント、ソーシャルキャピタルをキーワードに、人々が参加し学びあう場として、健康・医療のカフェや慢性疾患セルフマネジメントプログラム(CDSMP)、ICT(情報コミュニケーション技術)の活用が期待されている。すでに日本にあるカフェやグループでの学びあいの活動(孫, 2015)をヘルスリテラシーの視点から分析し、ICTの活用を検討する必要性がわかる。

2. 研究の目的

ヘルスリテラシーに困難のある日本人が、健康課題に対して適切なヘルスリテラシーとストレス対処力を形成しながら、生涯を通じて学び成長していくための介入モデルを開発することである。国際比較研究によれば、日本人はEUや台湾よりもヘルスリテラシーが低く、他国よりも死亡率の低下が鈍化し、慢性疾患の管理も悪く喫煙率や自殺率は高く、警鐘が鳴らされている。超高齢社会を迎えるには、健康課題やストレスを克服できるヘルスリテラシーを向上させる介入が求められる。そのため、国内外の先駆的な介入の機能と役割を検討すると同時に、日本でも高いヘルスリテラシーを培っている人々が持つ技やノウハウ、ネットワーク、資源を明確にする。

3. 研究の方法

EUの高齢社会に向けたヘルスリテラシー向上の国際プロジェクト IROHLA で今後有望としてリストに挙げられていた海外の介入の理論的な分析を参考として、日本にある類似する既存の介入プログラムの参加者の調査と、高いヘルスリテラシーやストレス対処力を有していると推測される人々を調査し、その技やノウハウ、学び方、資源・ネットワークなどを明らかにすることとした。さらに、これらの結果の統合・分析から、EUで開発された包括的なヘルスリテラシー尺度 HLS-EU-Q47 とストレス対処力 SOC とその背景にある意思決定スキルの測定により、これらの関連をみることを目的とした。

4. 研究成果

(1) 多様な慢性疾患を持つ仲間による参加型のアプローチ

国際プロジェクト IROHLA では、今後有望な介入のリストが提示されている。このリストには個人だけでなく、仲間、コミュニティによる包括的なアプローチで、人々が参加し学びあう場が効果的とされ、例として、慢性疾患セルフマネジメントプログラム(CDSMP)が挙げられていた。このCDSMPは日本でも実施されていて、その参加者におけるヘルスリテラシーとSOCと意思決定スキルの変化を検討するため、調査を実施した。調査はCDSMPの受講開始前、受講3ヶ月後、6ヶ月後の3時点で行い、ヘルスリテラシーを主要評価項目、熟慮型の意思決定の程度(意思決定行為尺度(Radfordほか, 1989)の熟慮サブスケール)、意思決定時の行動(4項目)を副次的評価項目とした。2020年度までに参加者82名から回答が得られ、そのうち、追跡調査が完了した67名のデータを解析した。その結果、ヘルスリテラシーは受講3ヶ月後に有意に改善しており($P=0.012$)、熟慮型の意思決定の程度は受講6ヶ月後までに向上している傾向がみられた($P=0.099$)。一方で意思決定スキルについては、有意な変化はみられなかった($P=0.832$)。これにより個人だけでなく仲間による参加型のアプローチの、ヘルスリテラシーに対する効果が実証された。

(2) 高いヘルスリテラシーを有すると予想された高齢者への質問紙調査

高いヘルスリテラシーを有すると予想され、特に介入を受けずとも学び自立する高齢者が、次世代に自らの健康と文化を伝える活動をする団体「新老人の会」会員を対象に質問紙調査を行った。有効回答626名(有効回答率41.7%)の回答を分析した結果、ヘルスリテラシーの平均値は 30.7 ± 8.0 点であり、先行研究での60代の 28.2 ± 8.8 点より、やや高めだった。ヘルスリテラシーが、どのような相談資源、それらから得た知識数、どのような「健康に関する知識が身についたと思う契機」と関連するか検討するため、ヘルスリテラシー得点を従属変数、相談資源、それらから得た知識数、契機(項目ごとに投入)を独立変数として順に投入し、性別、年齢で制御し、階層的重回帰分析を行った。その結果、かかりつけ医なども含め、医療者とのつながりが関連していた。しかし、医療者とのつながり以外、ヘルスリテラシーと関連する明確な場や資源が明らかにならなかった。そのため、全国調査において、ヘルスリテラシーの4つの能力の内、評価及び活用能力が低かった(Nakayama et al., 2015)ことから、収集・理解するまではできても、評価・活用する、つまり適切に判断して意思決定することが難しかったことが挙げられ、意思決定スキルの重要性に着目した。

(3) 包括的ヘルスリテラシーとストレス対処力の測定による診断と場や資源の情報提供のためのサイト構築

市民、患者、医療専門職がヘルスリテラシーやストレス対処力について学ぶことができる資源として活用しているWebページ「健康を決める力(<http://www.healthliteracy.jp/>)」において、Webページを訪問した人を対象に、包括的ヘルスリテラシーとストレス対処力の測定をしつつ調査に協力してもらうサイトを構築した。ヘルスリテラシー、ストレス対処力、意思決定のスキルや情報の信頼性の確認の実施有無、健康や医療の情報源に関する利用意向並びに既存のコンテンツの閲覧状況との関連について調査を継続して行っている。調査協力へアクセスした者の、ヘルスリテラシーやストレス対処力のレベル、意思決定スキルの関連を明らかにし、それらの向上のための資料としたい。

引用文献

Duong, T., Lin, I., Sorensen, K., Pelikan, J., Van den Broucke, S., Lin, Y., & Chang, P.

- (2015). Health literacy in taiwan: A population-based study. *Asia-Pacific Journal of Public Health / Asia-Pacific Academic Consortium for Public Health*, 27 doi:10.1177/1010539515607962
- HLS-EU Consortium. (2012). Comparative Report on Health Literacy in Eight EU Member States. The European Health Literacy Project 2009–2012. Retrieved from http://cpme.dyndns.org:591/adopted/2015/Comparative_report_on_health_literacy_in_eight_EU_member_states.pdf
- 国立教育政策研究所. (2013). 成人スキルの国際比較 : OECD 国際成人力調査 (PIAAC) 報告書. 明石書店.
- 中山和弘. (2014). ヘルスリテラシーとヘルスプロモーション, 健康教育, 社会的決定要因. *日本健康教育学会誌*. 22(1). 76-87.
- Nakayama, K., Osaka, W., Togari, T., Ishikawa, H., Yonekura, Y., Sekido, A., & Matsumoto, M. (2015). Comprehensive health literacy in japan is lower than in europe: A validated japanese-language assessment of health literacy. *BMC Public Health*, 15, 505-x. doi:10.1186/s12889-015-1835-x
- 日本国際交流センター. (2011). 国民皆保険達成から 50 年 : 『ランセット』日本特集号 [Japan: Universal health care at 50 years]. 東京: 日本国際交流センター.
- Nutbeam, D. (2000). Health literacy as a public health goal: A challenge for contemporary health education and communication strategies into the 21st century. *Health Promotion International*, 15(3), 259-267. doi: 10.1093/heapro/15.3.259
- 孫大輔. (2015). カフェ型ヘルスコミュニケーションによる市民参加型の健康づくり 対話が可能にする変容的学習. *臨床作業療法*, 12(1), 15-19.
- 戸ヶ里泰典, 山崎喜比古, 中山和弘, 横山由香里, 米倉佑貴, & 竹内朋子. (2015). 13 項目 7 件法 sense of coherence スケール日本語版の基準値の算出. *日本公衆衛生雑誌*. 62(5). 232-237. doi:10.11236/jph.62.5_232
- U.S. Department of Education, National Center for Education Statistics. (2006). The Health Literacy of America's Adults: Results from 2003 National Assessment of Adult Literacy. US Fed News Service, Including US State News. Retrieved from <https://nces.ed.gov/pubs2006/2006483.pdf>

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計10件（うち査読付論文 4件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 3件）

1. 著者名 北奈央子	4. 巻 17(2)
2. 論文標題 日本人女性の活躍推進とメノポーズカウンセラー資格取得との関連と、メノポーズカウンセラーの活躍推進に必要なサポートの検討	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 更年期と加齢のヘルスケア	6. 最初と最後の頁 45-48
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 中山和弘	4. 巻 70(12)
2. 論文標題 健康資源の気づき方、見つけ方、生かし方：“つながり”の持つ効果（特集「困難を乗り越える力」を持った看護職になる）	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 看護	6. 最初と最後の頁 82-87
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 中山和弘	4. 巻 84(10)
2. 論文標題 あふれる健康情報とどうつき合う？ヘルスリテラシー入門（特集 健康情報 それ、ホント？）	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 栄養と料理	6. 最初と最後の頁 9-21
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 中山和弘	4. 巻 101
2. 論文標題 職員のヘルスリテラシーを高めるには	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 地方公務員 安全と健康フォーラム	6. 最初と最後の頁 10～13
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 中山 和弘	4. 巻 25
2. 論文標題 ヘルスリテラシーとヘルスコミュニケーションの方向性	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 日本健康教育学会誌	6. 最初と最後の頁 149 ~ 150
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.11260/kenkokyoiku.25.149	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 中山和弘	4. 巻 45
2. 論文標題 【SNS時代の精神医学】 精神科医が注意すべきソーシャルメディアリテラシー	5. 発行年 2016年
3. 雑誌名 臨床精神医学	6. 最初と最後の頁 1259-1267
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 中山和弘	4. 巻 32
2. 論文標題 患者さんや家族が本当に必要としている薬の情報とは何か? 日本人の包括的ヘルスリテラシーはヨーロッパより低い	5. 発行年 2016年
3. 雑誌名 臨床医薬	6. 最初と最後の頁 555-560
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Matsumoto M, Nakayama K	4. 巻 17
2. 論文標題 Development of the health literacy on social determinants of health questionnaire in Japanese adults.	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 BMC public health	6. 最初と最後の頁
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1186/s12889-016-3971-3	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 菱沼典子, 高橋恵子, 松本直子, 佐藤晋巨, 八重ゆかり, 中山和弘, 廣瀬清人, 有森直子	4. 巻 20
2. 論文標題 看護系大学が開設する健康相談来訪者の骨粗鬆症予防に関するヘルスリテラシー	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 聖路加看護学会誌	6. 最初と最後の頁 3-8
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 佐居由美, 中山和弘	4. 巻 20
2. 論文標題 看護系大学が運営するWebサイトにおける「よろず相談」内容の分析 (An Analysis of Online Health Counseling Content on a Website Administered by a Nursing College)	5. 発行年 2016年
3. 雑誌名 聖路加看護学会誌	6. 最初と最後の頁 35-40
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計29件 (うち招待講演 10件 / うち国際学会 1件)

1. 発表者名 中山和弘, 高橋勇太, 米倉佑貴
2. 発表標題 ヘルスリテラシー、Sense of coherence (SOC) 及び健康指標の関連: 「新老人の会」会員を対象として
3. 学会等名 第38回日本看護科学学会学術集会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 萩原加奈子
2. 発表標題 子どもの学習プロセスに基づくヘルスリテラシー尺度の日本における利用可能性
3. 学会等名 日本学校保健学会第65回学術大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 高橋勇太, 中山和弘, 米倉佑貴
2. 発表標題 ヘルスリテラシーと相談資源及び得た知識、契機 との関連：新老人の会会員を対象として
3. 学会等名 第77回日本公衆衛生学会総会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 檀谷ひとみ, 中山和弘
2. 発表標題 Health numeracy and the effect of pictographs on understanding treatment risks and benefits among Japanese adults
3. 学会等名 16th International Conference on Communication in Healthcare (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 中山和弘, 高橋勇太, 米倉佑貴
2. 発表標題 高齢者における健康に関する情報源の利用意向と信頼性の確認の実施状況：『新老人の会』会員を対象として
3. 学会等名 第27回日本健康教育学会学術大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 高橋勇太, 中山和弘, 米倉佑貴
2. 発表標題 高齢者が健康に関する知識を身に付けた契機とその情報源：「新老人の会」会員を対象として
3. 学会等名 第27回日本健康教育学会学術大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 中山和弘
2. 発表標題 精神科診断のためのヘルスリテラシーの活用「ヘルスリテラシーとは何か？」
3. 学会等名 第38回精神科診断学会（招待講演）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 中山和弘
2. 発表標題 ヘルスリテラシー：健康を決める力
3. 学会等名 第23回聖路加看護学会学術大会学術交流集会（招待講演）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 戸ヶ里泰典, 中山和弘, 横山由香里, 米倉佑貴, 山崎喜比古
2. 発表標題 思春期における家族機能と成人期以降のSense of Coherenceとの関連 横断デザインによる全国調査の結果より
3. 学会等名 第43回日本保健医療社会学会大会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 中山和弘, 檀谷ひとみ
2. 発表標題 健康や医療に関する情報源としての各種メディアや専門職の利用意向と情報の信頼性の確認の実施状況
3. 学会等名 第26回日本健康教育学会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 檀谷ひとみ, 中山和弘
2. 発表標題 日本人のニュメラシーとリスク情報の理解度及びピクトグラフの効果
3. 学会等名 第26回日本健康教育学会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 中山和弘
2. 発表標題 AI時代の医薬品情報のあり方を考える「日本人のヘルスリテラシーは低い：意思決定支援のための適切な情報提供のあり方」
3. 学会等名 第20回日本医薬品情報学会総会・学術大会（招待講演）
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 中山和弘
2. 発表標題 ヘルスリテラシーと情報に基づく意思決定
3. 学会等名 日本保健医療社会学会第1回定例研究会（招待講演）
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 中山和弘
2. 発表標題 今なら間に合う 情報セキュリティあの手この手 新たなつながりが生まれる場 ソーシャルメディアとの付き合い方
3. 学会等名 Nursing Business
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 中山和弘
2. 発表標題 健康生成論とSOC の理論に立ち返る～健康生成力SOC と関連要因・概念「ヘルスリテラシーと健康生成力SOC の関係」
3. 学会等名 第76回日本公衆衛生学会総会（招待講演）
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 米倉佑貴
2. 発表標題 健康生成論とSOC の理論に立ち返る～健康生成力SOC と関連要因・概念「SOC の分布とその関連要因の国際的共通性と独自性」
3. 学会等名 第76回日本公衆衛生学会総会（招待講演）
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 戸ヶ里泰典、横山由香里、米倉佑貴、中山和弘、竹内朋子、山崎喜比古
2. 発表標題 健康生成力概念SOCに関する全国総合調査（第1報） SOCと社会経済的地位
3. 学会等名 第76回日本公衆衛生学会総会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 横山由香里、戸ヶ里泰典、米倉佑貴、中山和弘、竹内朋子、山崎 喜比古
2. 発表標題 健康生成力概念SOCに関する全国総合調査（第2報） SOCと社会関係・社会参加
3. 学会等名 第76回日本公衆衛生学会総会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 米倉佑貴、戸ヶ里泰典、横山由香里、中山和弘、竹内朋子、山崎喜比古
2. 発表標題 健康生成力概念SOCに関する全国総合調査（第3報） SOCとストレス・精神健康
3. 学会等名 第76回日本公衆衛生学会総会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 檀谷ひとみ、中山和弘
2. 発表標題 医療リスク情報の理解度とニュメラシー及びヘル スリテラシーとの関連
3. 学会等名 第76回日本公衆衛生学会総会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 中山和弘、檀谷ひとみ
2. 発表標題 健康・医療の情報源の利用経験とヘルスリテラシーの関連
3. 学会等名 第82回日本健康学会総会（旧日本民族衛生学会）
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 中山和弘、檀谷ひとみ
2. 発表標題 健康・医療情報の信頼性の確認状況とヘルスリテラシーの関連
3. 学会等名 第37回日本看護科学学会学術集会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 中山和弘、檀谷ひとみ
2. 発表標題 健康・医療情報の信頼性の確認状況とヘルスリテラシーの関連
3. 学会等名 第37回日本看護科学学会学術集会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 高橋恵子、佐藤晋巨、松本直子、菱沼典子、中山和弘、朝川久美子、有森直子
2. 発表標題 市民のヘルスリテラシー向上を目指した参加型学習プログラムの評価 プログラム終了直後のアンケート結果から
3. 学会等名 聖路加看護学会学術大会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 米倉佑貴, 中山和弘
2. 発表標題 医学部学生, 日本人一般住民, 海外のヘルスリテラシーの比較
3. 学会等名 第25回日本健康教育学会学術大会
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 中山和弘
2. 発表標題 ヘルスリテラシーと糖尿病
3. 学会等名 第32回京都糖尿病教育研究会(招待講演)
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 中山和弘
2. 発表標題 医療の情報化と看護情報学の未来「ヘルスリテラシーと意思決定支援」(シンポジウム)
3. 学会等名 日本看護研究学会第42回学術集会(招待講演)
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 中山和弘
2. 発表標題 ヘルスリテラシーと意思決定支援の必要性(基調講演)
3. 学会等名 第54回日本医療・病院管理学会学術総会(招待講演)
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 中山和弘
2. 発表標題 周産期の健康を決める力 - ヘルスリテラシーを身につける
3. 学会等名 第13回日本周産期メンタルヘルス学会学術集会(招待講演)
4. 発表年 2016年

〔図書〕 計6件

1. 著者名 山崎喜比古、朝倉隆司(中山和弘 分担執筆)	4. 発行年 2017年
2. 出版社 有信堂高文社	5. 総ページ数 242
3. 書名 新・生き方としての健康科学	

1. 著者名 山崎喜比古、戸ヶ里泰典（中山和弘、米倉佑貴 分担執筆）	4. 発行年 2017年
2. 出版社 有信堂高文社	5. 総ページ数 256
3. 書名 健康生成力SOCと人生・社会：全国代表サンプル調査と分析	

1. 著者名 松浦賢長、小林廉毅、苅田香苗（中山和弘 分担執筆）	4. 発行年 2018年
2. 出版社 朝倉書店	5. 総ページ数 148
3. 書名 コンパクト公衆衛生学（第6版）	

1. 著者名 福田洋(編著), 江口泰正(編著)（中山和弘 分担執筆）	4. 発行年 2016年
2. 出版社 大修館書店	5. 総ページ数 168
3. 書名 ヘルスリテラシー：健康教育の新しいキーワード	

1. 著者名 中山和弘, 瀬戸山陽子, 藤井徹也, 篠崎恵美子, 会田敬志, 高木晴良, 戸ヶ里泰典	4. 発行年 2017年
2. 出版社 医学書院	5. 総ページ数 380
3. 書名 系統看護学講座別巻 看護情報学(第2版)	

1. 著者名 森玲奈(編著)(中山和弘 分担執筆)	4. 発行年 2017年
2. 出版社 ミネルヴァ書房	5. 総ページ数 226
3. 書名 「ラーニングフルエイジング」とは何か: 超高齢社会における学びの可能性	

〔産業財産権〕

〔その他〕

健康を決める力 http://www.healthliteracy.jp/
--

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	安酸 史子 (YASUKATA Fumiko) (10254559)	関西医科大学・看護学部・教授 (34417)	
研究分担者	本城 由美 (佐居由美) (HONJO Yumi) (10297070)	聖路加国際大学・大学院看護学研究科・准教授 (32633)	
研究分担者	戸ヶ里 泰典 (TOGARI Taisuke) (20509525)	放送大学・教養学部・教授 (32508)	

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	瀬戸山 陽子 (SETOYAMA Yoko) (20649446)	東京医科大学・医学部・講師 (32645)	
研究分担者	石川 ひろの (ISHIKAWA Hirono) (40384846)	帝京大学・私立大学の部局等・教授 (32643)	
研究分担者	孫 大輔 (SON Daisuke) (40637039)	東京大学・大学院医学系研究科(医学部)・講師 (12601)	
研究分担者	米倉 佑貴 (YONEKURA Yuki) (50583845)	聖路加国際大学・大学院看護学研究科・助教 (32633)	

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	高橋 勇太 (TAKAHASHI Yuta)		
研究協力者	檀谷 ひとみ (DANYA Hitomi)		
研究協力者	北 奈央子 (KITA Naoko)		

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	萩原 加奈子 (HAGIWARA Kanako)		

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関